

主観的随伴経験と情動知能が感情に及ぼす影響

豊田 弘司・島津 美野*

奈良教育大学学校教育講座 (心理学)

(平成18年4月3日受理)

The Influences of Perceived Experiences of Contingency and Emotional Intelligence on Emotion

Hiroshi TOYOTA, Miya SHIMAZU*

(Department of Psychology, Nara University of Education, Nara 630-8528, Japan)

(Received April 3, 2006)

Abstract

The purpose of the present study was to examine the relationships among the perceived experiences of contingency and incontinuity, emotional intelligence, shyness, and self-esteem. Participants were 322 undergraduates. The perceived experiences of contingency and incontinuity were assessed by the perceived experiences of contingency scales developed by Maki et al. (2003). This scale have 15 items corresponding to perceived experiences of contingency and 15 items corresponding to perceived experiences of incontinuity. The emotional intelligence were measured by two scales, WLEIS (Wong & Law, 2002) and J-ESCQ (Toyota, et al., 2005) originally developed by Taksic (2002). Analysis of results based on Structure equation modeling (SEM) indicated that the perceived experiences of contingency and incontinuity influenced self-esteem and shyness via emotional intelligence, although those experiences have small direct influences on both of them. The levels of self-esteem and shyness in 8 groups by 2 levels (low and high) and 3 scales (the perceived experiences of contingency, those of incontinuity and emotional intelligence) were compared. These comparisons revealed that the high levels of the perceived experiences of contingency and emotional intelligence led to higher level of self-esteem and lower level of shyness, and that the effects of the perceived experiences of contingency on shyness were affected by the levels of emotional intelligence. Although the level of self-esteem was influenced by the level of the perceived experiences of incontinuity, the level of shyness was not. These results were interpreted as showing that the perceived experiences of contingency and incontinuity mainly influenced shyness and self-esteem via emotional intelligence.

Key Words : the perceived experiences of contingency,
the perceived experiences of incontinuity,
emotional intelligence,
Self-esteem,
Shyness

キーワード : 主観的随伴経験,
主観的非随伴経験,
情動知能,
自尊感情,
シャイネス

* 奈良教育大学大学院在学

1. はじめに

人は、自分自身を価値あるものとして考え、自らの重要性を実感できるときに、積極的に生きることができ、それ故に心理的な充足感を持つことができる。James (1890) が、上述したような感情を自尊感情と呼んで以来、自尊感情 (self-esteem) に関する多くの研究が行われてきた。例えば、藤原 (1981) は、一般に自尊感情の高い人は内的安定度が高く、柔軟性に富み、自己をよく受容することができることを示している。また、自尊感情が高いと、対人関係における不安が低く、とらわれを持つことなく他者を受容し、自発性があり積極的に自己を自由に表現しうることにも明らかにされている。一方、自尊感情が低下すると、劣等感や無価値感にさいなまれ、不適応に陥る可能性があると言われている。

発達の観点からみると、青年期はこの自尊感情が心理状態に大きく反映される時期であり、そのために、多くの研究者が自尊感情と青年期の心理状態の関係を検討してきた。青年期の心理状態を研究した最も有名な研究者としては、Erikson があげられる。彼は、青年期を、アイデンティティ (自我同一性) の確立の時期と呼び、自己関心の強さ、他者のまなざしへの過敏さ、自己の将来への関心などが行動特徴として顕著になると指摘している。そして、この青年期において自尊感情の低下によって、日常生活における不適応に陥るケースが多いことも多くの研究者によって明らかにされている。

このように青年期における自尊感情の重要性が指摘されるとともに、自尊感情を規定する要因の検討も行われてきた。例えば、学業成績が自尊感情を規定することが明らかにされている (瀧野・斎藤, 1991)。また、友人との関係や家族との関係、さらには学校での部活動への参加といった社会的要因が自尊感情を規定することも指摘されている (松岡・押澤, 2001)。これらの研究から確実に言及できることは、青年の個人的な経験によって自尊感情が影響を受けるということである。中でも周囲の人と対人場面での経験が自尊感情を規定する要因として重要なのである。

では何故、このような対人場面での経験が自尊感情を規定する可能性が高いのであろうか。それは、対人場面は相手の反応が直接、即座にフィードバックされる状況であり、その反応性が極めて高いからである。それ故、相手からの反応が直接自分の感情を刺激する可能性も高くなる。特に、自分が相手に積極的に関わった結果、相手から好意的な反応が返された場合にはよい感情が喚起され、反対に好意的でない反応があった場合には悪い感情が喚起される。このように、相手の反応のあり方が自分の感情を規定する大きな要因なのである。

このような要因の一つに随伴性を考えることができ

る。この随伴性とは、ある行動にある結果が伴うという時間的接近性を言及する言葉である。そして、自分のした行動により結果が随伴する場合と随伴しない場合に分けられ、前者のような場面における経験を随伴経験、後者のような場面での経験を非随伴経験と呼ぶ。牧・関口・山田・根建 (2003) は、このような随伴・非随伴経験が中学生における無気力感及び自己効力感 (自分のこれからの行動に対する期待) に影響することを明らかにした。つまり、自分の行動に対する環境からの応答性の欠如によって、自身の行為で結果をコントロールできない非随伴的狀況になり、そのことが目的を見いだせない無気力感を生み出すのである。また、自分自身の行動が結果となることによって、うまく行うことができるという確信である自己効力感が高くなるのである。同じように、豊田 (2006) は女子大学生においても、随伴・非随伴経験が自己効力感のみならず自尊感情にも影響していることを明らかにしている。すなわち、自分自身の行動が結果をコントロールできる随伴経験が、自尊感情や自己効力感という肯定的な感情に影響することは確かに示されたのである。しかし、豊田 (2006) は、随伴経験の原因を自分の努力や能力といった内的に帰属しなければ、自尊感情の増加が低下する可能性も指摘されている。反対に、非随伴経験の原因を内的な全体的要因に帰属することで無気力感が高まるという改訂学習無力感モデルの重要性も指摘されている。言い換えれば、随伴・非随伴経験と自尊感情の間にある特定の要因が介在する可能性は否定できないであろう。上述した牧ら (2003) では介在する変数として原因帰属・動機付けが想定されている。これらの変数は、個人の認知過程を反映する変数であり、他者との関係を考慮した変数ではない。自尊感情が社会的経験の文脈の中で影響される可能性が高いことを考慮すると、対人場面に影響する変数を想定する方が妥当であろう。

対人場面に影響する変数は多いが、近年、対人場面における感情の制御能力に対する関心が高まってきている。中でも、情動知能 (emotional intelligence) は注目され、多くの研究がなされている (豊田・森田・金敷・清水, 2005)。情動知能とは情動を扱う個人の能力と定義され (Mayer, 1990)、具体的な下位能力として自分自身や他人の感情や情動を監視する能力、これらの感じ方や情緒の区別をする能力及び個人の思考や好意を導くための感じ方や情緒に関する情報を利用できる能力であると指摘している。このような情動知能の個人差が自己概念や自己認識といったものを構成し、個人の様々な感情に対し、影響を及ぼすことが考えられる。そこで、本研究の第1の目的は、随伴経験と自尊感情の関係を介する情動知能の役割を明らかとすることである。

また、牧ら (2002) 及び豊田 (2006) は、随伴経験

が自尊感情や自己効力感という肯定的感情を規定することを示したが、否定的感情については検討されていない。肯定的感情において示唆されたことが否定的感情においてそのまま維持されるとは限らない。というのは、人間の感情に関する肯定と否定の次元は、必ずしも対称とはならないからである。例えば、愛情と憎しみは相反する感情として認識されているが、この両者は心理的に近い感情であり、これらの感情と最も離れた感情が無関心という感情になる。したがって、随伴経験が否定的感情に及ぼす効果が、肯定的感情に及ぼすそれと反対の関係になるとは限らないのである。そこで、本研究は、自尊感情と反対の否定的感情の一つであるシャイネスを取りあげる。そして、随伴・非随伴経験がシャイネスに及ぼす影響も明らかにすることが第2の目的である。

2. 方法

2. 1. 調査対象

調査対象は、関西にある2つの大学の学生322名（男39, 女283）であり、平均年齢は18歳8か月（18歳0か月～24歳7か月）であった。

2. 2. 調査内容

2. 2. 1. 特性シャイネス尺度

シャイネスの測定に関しては、相川（1991）による特性シャイネス尺度を用いた。この尺度は16項目（例「私は新しい友人がすぐできる」「私は人がいる所では気おくれしてしまう」等）からなっており、「よくあてはまる(5)」「ややあてはまる(4)」「どちらともいえない(3)」「あまりあてはまらない(2)」「まったくあてはまらない(1)」の5段階評定であった。この尺度はB5判の用紙に印刷され、それぞれの尺度の各項目と、評定段階に該当する数字を記入する（ ）が印刷されていた。

2. 2. 2. 自尊感情尺度

自尊感情の測定には、山本・松井・山成（1982）による自尊感情尺度を用いた。この尺度は、Resenberg（1965）の尺度の日本版であり、10項目（例「少なくとも人並みには、価値のある人間である」、「色々な良い素質をもっている」等）からなっている。評定尺度は、5段階尺度（「1. あてはまらない、2. ややあてはまらない、3. どちらともいえない、4. ややあてはまる、5. あてはまる」）である。

2. 2. 3. 主観的随伴経験尺度

牧ら（2003）によって開発された尺度を用いた。この尺度は随伴経験を調べる15項目（例「困っているとき友人に助けを求めたら、力になってくれた」「友人の悩みを聞いてあげたら、感謝された」等）、及び非随伴経験を調べる15項目（例「友達のために思っていたことが、逆に誤解された」「親切に接していたのに、いじわるなことを

された」等）からなる全30項目の尺度であった。評定は「よく経験したことがある(4)」「少しは経験したことがある(3)」「あまり経験したことがない(2)」「全く経験したことがない(1)」の4段階であった。この尺度はB5判の用紙に印刷され、それぞれの尺度の各項目と、評定段階に該当する数字を記入する（ ）が印刷されていた。

2. 2. 4. WLEIS

情動知能を測定する尺度の一つとしてWLEISを用いた。この尺度は「自己の情動評価」（例「私は、たいていの場合、何故自分がそんな気持ちになるのかわかる。」「私は、自分の気持ちを良く理解できている。」等）「他者の情動評価」（例「私は、友人の行動をみれば、その友人の気持ちがわかる。」「私は、他人を観察して、その人の気持ちをわかろうとしている。」等）「情動の利用」（例「私は、いつも自分の目標を立て、それを達成するために全力を尽くす。」「私は、いつも自分が有能な人間であると自分に言い聞かせている。」等）及び「情動の調節」（例「私は、自分の感情の高まりをおさえられるので、難しい課題であってもそれらをうまく処理できている。」「私は、自分の気持ちをコントロールするのがとても得意である。」等）の4因子、各4項目からなる全16項目の尺度である。各項目に対しては「非常にあてはまる(7)」「かなりあてはまる(6)」「少しあてはまる(5)」「どちらともいえない(4)」「あまりあてはまらない(3)」「ほとんどあてはまらない(2)」「全くあてはまらない(1)」の7段階評定が用いられた。この尺度はB5判の用紙に印刷され、それぞれの尺度の各項目と、評定段階に該当する数字を囲む1から7までの数字が印刷されていた。

2. 2. 5. ESCQ

もう一つの情動知能の測定尺度として、豊田ら（2005）が作成した日本版ESCQを用いた。この尺度は「情緒の認識と理解」（例「私は、知り合いに出会った時には、すぐにその知り合いの気分がわかる」「私は、友達の気分の変化を見抜くことができる」等）、「情緒の表現と命名」（例「私は、自分の気持ちや感情を表すことがすぐに浮かんでくる」「私は、自分が感じている複数の感情の一つひとつ言葉にすることができる」等）、「情緒の制御と調節」（例「私は、誰かにほめられると、より熱心に頑張るようになる」「私は、気分のよい時には、なかなかその気分は沈まない」等）の3因子からなる28項目であるが、各因子のバランスを考慮して、各因子の因子負荷量の高い項目を8項目ずつ抽出し、全24項目に改訂した尺度を用いた。各項目に対しては「いつもそうである(5)」「だいたいそうである(4)」「時々そうである(3)」「めったにそうでない(2)」「決してそうでない(1)」の5段階評定尺度が用いられた。この尺度はB5判の用紙に印刷され、教示文とそれぞれの尺度の各項目、評定段階に該当する数字を囲む1から5までの数字が印刷されていた。

上述した5つの尺度はB5判用紙3枚の調査用紙に印刷された。すなわち、主観的随伴経験尺度及びWLEISからなる調査用紙、自尊心感情尺度及び特性シャイネス尺度からなる調査用紙、及びESCQが示された調査用紙の合計3枚の調査用紙である。

2. 3. 調査手続

調査は、第1著者の担当授業中に集団的に実施された。被調査者は上述の尺度が印刷された用紙を配付され、該当する性別に○をつけ、年齢と学籍番号を記入するように指示された後、調査項目の評定の仕方についての教示を受けた。そして、調査者によって読み上げられる項目に対して、評定段階に対応する数字を()に記入するもしくは、該当する数字を囲んでいった。

3. 結果

3. 1. 尺度間の相関関係

Table 1には、5つの尺度の下位尺度も含めた尺度得点間の相関係数が示されている。わかりやすいように、

Tableの相関係数を縦にみていき、実質的な相関係数のめやすである.30以上の関係に注目した。その結果、「随伴経験」では、「自尊心感情 (r=.34)」、「シャイネス (r=-.33)」、WLEISの「情動の利用 (r=.39)」及びESCQの「情動の制御と調節 (r=.34)」及び「情動の認識と理解 (r=.49)」との間に実質的な相関係数が得られた。また、「非随伴経験」では、ESCQの「情動の制御と調節 (r=-.32)」との関係においてのみ中程度の相関が得られた。「自尊心感情」では、「シャイネス (r=-.32)」との負の相関、WLEISの「情動の利用 (r=.42)」及びESCQの「情動の表現と命名 (r=.39)」と「情動の制御と調節 (r=.36)」との相関が実質的であった。シャイネスに関しては、ESCQの3つの尺度得点すべてとの間に実質的な負の相関が得られた。

3. 2. 構造方程式モデリングによる分析

Table 1の相関係数から実質的な相関係数を得た関係のみを残し、これらの観測変数間の関係を検討するために、共分散構造分析を行った。まず、先行研究(豊田, 2006)から、随伴経験が自尊心感情に影響するというパス、

Table 1 尺度間の相関関係

相関行列	主観的随伴経験尺度				WLEIS				ESCQ	
	随伴経験	非随伴経験	自尊心感情	シャイネス	自己の情動評価	他者の情動評価	情動の利用	情動の調節	情動の表現と命名	情動の制御と調節
主観的随伴経験尺度										
随伴経験										
非随伴経験										
自尊心感情尺度										
シャイネス尺度										
WLEIS										
自己の情動評価										
他者の情動評価										
情動の利用										
情動の調節										
ESCQ										
表現と命名										
制御と調節										
認識と理解										

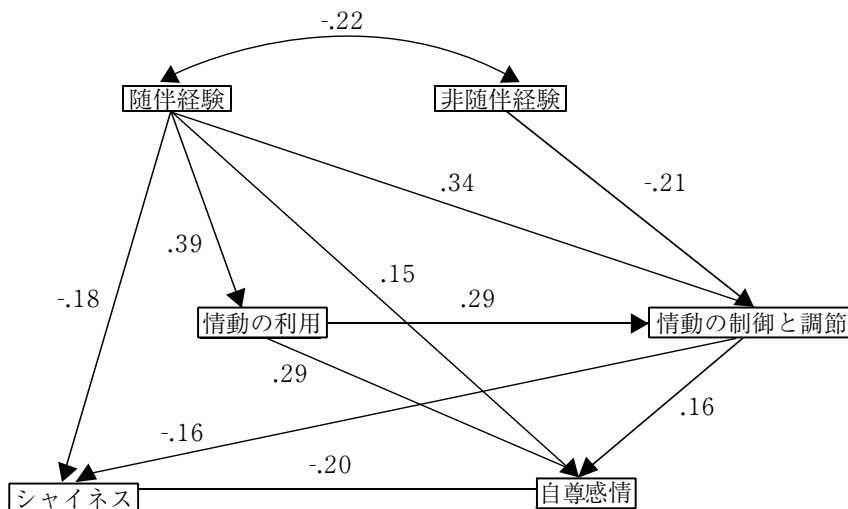


Fig.1 6つの観測変数間の関係図

Table 2 随伴経験、非随伴経験、情動知能の高低による群ごとの自尊感情とシャイネス

随伴経験 の量	非随伴経験 の量	情動知能 の量	n		随伴経験	非随伴経験	情動の利用	情動の制御と 調節	自尊感情	シャイネス
高	高	高	45	<i>M</i>	52.84	31.84	19.82	31.96	32.76	41.73
				<i>SD</i>	2.87	4.47	3.93	2.15	5.80	9.26
高	高	低	36	<i>M</i>	51.75	33.58	16.86	27.67	30.50	44.36
				<i>SD</i>	2.36	4.79	4.20	1.72	7.09	10.37
高	低	高	40	<i>M</i>	54.43	21.25	21.08	35.03	34.88	38.50
				<i>SD</i>	3.05	3.45	4.33	2.56	6.92	10.09
高	低	低	36	<i>M</i>	52.39	21.31	16.36	28.03	32.75	40.86
				<i>SD</i>	2.79	2.55	4.12	2.43	6.34	8.30
低	高	高	41	<i>M</i>	44.00	33.34	16.44	29.78	29.29	45.12
				<i>SD</i>	3.39	4.05	3.77	1.87	6.48	10.75
低	高	低	48	<i>M</i>	41.00	35.02	14.73	23.98	27.75	49.33
				<i>SD</i>	4.87	4.78	4.30	2.80	6.06	11.00
低	低	高	36	<i>M</i>	43.17	23.39	16.36	31.22	31.33	41.92
				<i>SD</i>	4.83	3.14	3.75	2.15	5.19	9.84
低	低	低	40	<i>M</i>	42.95	23.93	14.78	24.90	29.98	51.85
				<i>SD</i>	5.38	3.13	4.55	3.36	6.22	10.61

そして、随伴経験の多さは情動知能の高さに関連し、その情動知能は自尊感情に関連するというパス、さらに、随伴経験の多さはシャイネスに負の影響をもたらすというパス、最後に随伴経験と非随伴経験の負の関係を仮定したモデルを作成した。この仮説モデルに関して、随伴経験、非随伴経験、自尊感情、シャイネス、情動知能の7つの尺度の観測変数を用いた分析を行った。有意にならないパスを削除し、最終的に、すべてのパスが有意になるモデルを採択し、Fig.1に示した。図中の単方向の矢印の数値は標準化パス係数、双方向のそれは相関係数を示している。また、目的変数となる観測変数に設定する誤差は省略してある。なお、「シャイネス」に対する説明率は18%、「自尊感情」に対するそれは23%、「情動の利用」に対するそれは15%、「情動の制御と調節」に対するそれは36%であった。

3. 3. 随伴経験と情動知能による組合せの効果

随伴経験と非随伴経験及び情動知能（ここではモデル図に示した「情動の利用」と「情動の制御と調節」の合計点を情動知能の得点とする）が、自尊感情、シャイネスに及ぼす効果が直線的か（各経験、情動知能の増加とともに自尊感情及びシャイネスが増加もしくは低下するのか）否かを確認するために、随伴経験尺度得点の高低、非随伴経験の高低、情動知能の高低を組み合わせ、被験者を8群に分け、自尊感情得点及びシャイネス得点の平均値を算出した。その結果がTable 2に示されている。

自尊感情得点に関して、2（随伴経験；高低）×2（非随伴経験；高低）×2（情動知能；高低）の分散分析を行ったところ、随伴経験の主効果（ $F_{(1,314)} = 19.35$

$p < .001$ ）が有意であり、随伴経験量の多い者が少ない者よりも自尊感情得点が高かった。また、非随伴経験の主効果（ $F_{(1,314)} = 9.19$ $p < .001$ ）も有意であり、非随伴経験量の多い者が少ない者よりも自尊感情得点が高かった。さらに、情動知能の主効果（ $F_{(1,314)} = 6.53$ $p < .05$ ）も有意であり、情動知能が高い者は低い者よりも自尊感情得点が高かった。

同じように、シャイネス得点に関しても同様の分散分析を行った。その結果、随伴経験の主効果（ $F_{(1,314)} = 24.69$ $p < .001$ ）が有意であり、随伴経験量の多い者が少ない者よりも、シャイネス得点が高かった。また、情動知能の主効果（ $F_{(1,314)} = 17.44$ $p < .001$ ）が有意であり、情動知能が高い者は低い者よりもシャイネス得点が高かった。さらに、随伴経験×情動知能の交互作用の主効果（ $F_{(1,314)} = 3.99$ $p < .05$ ）が有意であった。この交互作用について単純主効果検定を行ったところ、情動知能高群においては、随伴経験の単純主効果は有意ではなかったが、低群においてはその主効果が有意であった（ $F_{(1,314)} = 19.06$, $p < .001$ ）。これは、随伴経験が多い者は、情動知能の高低によってシャイネス得点の違いはないが、随伴経験の少ない者は、情動知能が高い者はシャイネス得点が少ないことを示している。また、随伴経験高群において、情動知能による単純主効果検定は5%水準で有意であり（ $F_{(1,314)} = 4.41$ $p < .05$ ）、随伴経験低群においてもそれは0.1%水準で有意であった（ $F_{(1,314)} = 24.27$ $p < .001$ ）。すなわち、随伴経験高群における情動知能の効果よりも、随伴経験低群における情動知能の効果が大きいことが示された。

4. 考 察

4. 1. 随伴経験からの影響

本研究の目的は、「随伴経験量」や「非随伴経験量」が「自尊感情」や「シャイネス」に与える影響と、その影響に「情動知能」がどのように介在変数として影響を与えるのかを検討することであった。

豊田 (2006) においては「随伴経験」と「自尊感情」及び「自己効力感」との関連が明らかにされ、牧ら (2003) においても、中学生における「随伴経験」と「自己効力感」との関係が認められている。これらの研究と同じく、本研究においても、Fig.1に示されているように、共分散構造分析の結果から「随伴経験」から「自尊感情」へ有意なパスが確認された。それ故、「随伴経験」と、肯定的な感情である「自尊感情」との関連性が追証されたのである。したがって、自分自身の行動と時間的に随伴して、その成果や結果を実感した経験をもつ頻度が高い者は自己を受容し、自分は価値のある存在であると認識する傾向が高いことを示唆するものである。

ただし、「随伴経験」からは「情動知能」の下位要因である「情動の利用」や「情動の制御と調節」への有意なパスの方が「自尊感情」へのパスよりもその影響が強くなっている。また、「情動の利用」や「情動の制御と調節」から「自尊感情」へのパスも「随伴経験」から「自尊感情」へのパスより強い正の影響をもっている。これは、「随伴経験」が「自尊感情」へ及ぼす直接的影響だけではなく、「情動知能」を介した間接的な影響も大きいことを示している。すなわち、「随伴経験」に遭遇した際に、自分自身及び他人の感情、情動を認識する能力や情動のコントロールをする能力によって、「自尊感情」への影響が強められたり、弱められたりする可能性が示唆されたのである。

Law, Wong & Song (2004) によれば、情動知能に関しては、多くの議論が展開され (Fineman, 1993; Mayer & Salovey, 1997; Schutte, Malouff, Hall, Haggerty, Cooper, Golden, & Dornheim, 1998), 情動知能の定義も多い。例えば, Salovey & Mayer (1990) による定義は「情動知能とは、情動を扱う個人の能力である。」というものである。そして、彼らは、具体的な情動知能の下位能力を以下のように指摘している。すなわち、自分自身や他人の感情 (feeling) や情動 (emotion) を監視 (モニター) する能力、これらの感じ方や情緒の区別をする能力及び個人の思考や行為を導くために感じ方や情緒に関する情報を利用できる能力である (豊田ら, 2005)。

このように、情動知能に関しては多くの定義があり、多くの側面を持っているが、本研究では特に「情動の利用」と「情動の制御と調節」による「自尊感情」との関係性を見いだした。「情動の利用」とは、自分自身でや

る気を高める、目標を立て、励まし全力を尽くせるようにするという能力である。また、「情動の制御と調節」とは、不快な感情を抑え、良い感情でいるように努めることや、自分の考えや感じ方に確信を持ち行うことが出来る能力のことである。情動知能の中でも「情動の利用」から「自尊感情」に対する影響が認められることは、目標を立てる、自分を励ますといった個人が全力を尽くすための能力が自尊感情へと結びついていることを示唆するものである。このように、「随伴経験」から「自尊感情」への直接的な影響も認められるが、「情動知能」を介することによる影響のあることが明らかにされたのである。これまでの研究 (牧ら, 2003; 豊田, 2006) では、随伴経験から自尊感情への直接的な影響しか検討しておらず、この両者間に介在する変数は全く考慮されなかった。しかし、本研究で情動知能が介在することが明らかになったことは、今後の研究に介在変数を考慮した検討が必要であることを示したといえよう。

4. 2. 非随伴経験からの影響

「非随伴経験」からは「情動の制御と調節」への正の影響を経て「自尊感情」への負の有意なパスが見られた。しかし、「非随伴経験」から「自尊感情」への直接的な有意なパスが見られなかった。このことは、自分自身の行動に結果を伴わないという「非随伴経験」によって「自尊感情」が低下することは可能性として低く、環境からの応答が無いという経験が多くても、「自尊感情」が必ずしも低下するわけではないことを示すものである。ただし、この結果は、豊田 (2006) で明らかにされた「非随伴経験」が「自尊感情」に与える影響、つまり「非随伴経験」が「自尊感情」を低める可能性を示したことと一致しない。しかしながら、パス値は有意には至らなかったものの「非随伴経験」の「自尊感情」への相関関係も -0.21 となっており、「自尊感情」を低下させる影響が全くないとはいえない。それ故、「非随伴経験」と「自尊感情」との間に、「情動知能」、特に「情動の制御と調節」という能力が介在し、「非随伴経験」による「自尊感情」の低下を緩和する働きを担っているであろう。したがって、自分の努力が成果を伴わなかった場合、このような経験で生じた不快な感情を抑制し、良い感情を高めようとする能力が「自尊感情」の低下を抑制する上で重要なのである。このような能力が備わっていれば、「非随伴経験」を受けたからと言って、必ずしも「自尊感情」が低下するとは言えないであろう。

また、「非随伴経験」からは「随伴経験」で見られた「情動の利用」への有意なパスが得られなかった。このことは、「情動の利用」能力は「随伴経験」によってのみ影響を受け、強められたり、弱められたりすることを示すものである。一方、「情動の制御と調節」は、「随伴経験」と「非随伴経験」いずれの経験からも影響される

可能性が高い。「情動の制御と調節」は、自分の努力が成果として報われた場合も、報われなかった場合もその両方の経験が必要なのであろう。

4. 3. 随伴経験と非随伴経験からの影響の比較

「シャイネス」に対して「随伴経験」から弱いながら直接的な負の影響が読み取れる。これは、「シャイネス」は対人場面において自分自身の行動が成果を伴う場合には生じにくいと考えることができる。しかし、「非随伴経験」からの直接的な影響は見られなかった。これは、自分自身の行動が成果を伴うことがない経験が多いといっても「シャイネス」が高まるとはいえないということを示唆している。したがって、対人場面で生じる「非随伴経験」は、「随伴経験」と比較して、「シャイネス」に対しても、「自尊感情」に対しても直接的な影響が顕著でないことが明らかになったのである。

また、注目すべき結果としては、「非随伴経験」が「情動の制御と調節」に影響し、この「情動の制御と調節」が「シャイネス」に負の影響を与えるということがあげられる。「非随伴経験」では、環境からの応答性が欠如することになるが、自分が情動をコントロールできる力を備えておくことによって、応答性の欠如によって生じる「シャイネス」を抑制できる可能性が示唆される。

Baldwin & Sinclair (1996) は、「自尊感情」の低い者が成功した場合には他者によって自分が受容されたという認識が発生する傾向が強いが、失敗した場合には他者から自分が拒否されたという認識する傾向が強いことを見いだしている。すなわち、「自尊感情」の低いシャイな人物が対人場面で思うように振る舞えないことを失敗と見なすと、そのことを他者による拒否と結びつけて考えやすいのである。彼らは、「シャイネス」による独特な認知構造の偏りが、このような防衛的の自己呈示という形をとらせると考えている。それ故、「シャイネス」を規定する要因は、認知構造なのである。本研究では、「情動知能」における「情動の制御と調節」が「シャイネス」を緩和できるという結果を得た。この結果は、Baldwin & Sinclair (1996) の視点からすれば、「情動知能」によって認知構造の偏りを是正する可能性があることを示唆するものである。

ただし、認知構造を是正するという視点からすれば、「情動知能」のどの側面を重視するかという見きわめが重要になる。本研究の結果は、「情動知能」の中の「情動の利用」が「自尊感情」という肯定的な感情変数には影響するが、「シャイネス」という否定的な感情変数には影響しないことが明らかにされた。また、「情動の制御と調節」は、「自尊感情」も「シャイネス」にも影響することが明らかにされた。したがって、各感情に応じて、「情動知能」の各側面を個人の中に育成し、活用す

ることが求められるといえる。

さらに、「シャイネス」に対しては「自尊感情」からの負の影響も認められている。つまり、「随伴経験」から直接的、もしくは「情動知能」を介して生じた「自尊感情」は「シャイネス」を抑制するように働くことが明らかとなった。そのことから、「随伴経験」などの個人に生じる経験が「情動知能」といった能力によって肯定的感情へとつながるならば、否定的感情の発生を抑制することが出来るといえよう。

4. 4. 随伴経験、非随伴経験及び情動知能の組合せの影響

上述した「随伴経験」、「非随伴経験」、「情動知能」の群分けによる分析から、「自尊感情」に対してそれぞれの要因が独立的に影響していることが明らかになった。したがって、「自尊感情」を高めるためには、「随伴経験」をより多く経験すること、「非随伴経験」を出来るだけ経験しないこと、及び「情動知能」を高めることが重要であることが示唆されたのである。

また、「シャイネス」においては、「非随伴経験」との関連性は見られず、「非随伴経験」から「シャイネス」が高まるということは示されなかった。しかし、「随伴経験」と「情動知能」が「シャイネス」に与える影響は大きいことが明らかとなった。

さらに、「随伴経験」と「情動知能」の交互作用が見られた。このことは、「シャイネス」に対する「随伴経験」の影響は強く、「情動知能」が高くて低くても、「シャイネス」の発生に対し、抑制的に機能する。ただし、その抑制機能は「情動知能」が低い人にとってより大きく、自己の情動をうまく扱うことが出来ない人に対して、他者からの結果のフィードバック効果はその後の感情を形成することに対し、強い影響を与えることが出来る。

一方、「随伴経験」から考察すれば、「随伴経験」が少ない者にとっては「情動知能」の影響が大きいことになる。すなわち、自分の行動が成果となって自分に返ってくるような経験が少なくても、そのときの自分自身の感情をコントロールできる能力や自分の情動をうまく利用できる者ならば、「シャイネス」という否定的な感情を感じる可能性が少ないのである。Leary (1986) は、「シャイネスは対人的な評価から学習されるものである」という定義を提唱しているが、「非随伴経験」が「シャイネス」に影響を与えないという結果及び「随伴経験」の少なさが「シャイネス」を必ずしも高めるものではないという結果は、上記の定義とは一致しないものである。本研究の結果から考察すれば、対人場面での個人に対する良い結果、言い換えれば受容されているという評価が返ってこなくても、個人内の感情のコントロール能力に

よって否定的な感情の発生を抑制できることが示唆されたといえよう。

本研究では、行動に成果が結びつくという経験が個人の感情にとって影響をもたらすが、結果が伴わないという経験をしたとしても必ずしも感情に対する負の影響をもたらすとは言えないことが示唆された。また、経験がもたらす影響と共に、個人内の情動知能が感情に対し影響を与えることが明らかになった。すなわち、情動知能を高めていくことによって、様々な肯定的な感情を高め、否定的な感情を低めることが出来るのである。この情動知能は、感情のみならず、個人の認知構造の形成に影響を与える要因である可能性があると考えられる。今後の研究においては、「情動知能」を認知構造に関わる介在変数の一つであるという視点から検討することを重要であり、この重要性を示唆できたことが、本研究の大きな貢献といえよう。

引用文献

- 相川充 1991 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 心理学研究, 62, pp.149-155.
- Baldwin, M. W., & Sinclair, L. 1996 Self-esteem and "If...then" contingencies of interpersonal acceptance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, pp.1130-1141.
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle*. New York: International Universities Press.
- Fineman, S. (Eds) 1993 *Emotion in organizations*. London: Sage.
- 藤原正博 1981 自我同一性と自尊感情の関係 遠藤辰雄 (編) アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版 pp.85-89.
- James, W. 1890 *The Principle of Psychology*. New York: Holt.
- Law, K. S., Wong, C. S., & Song, L. J. 2004 The construct and criterion validity of emotional intelligence and its potential utility for management studies. *Journal of Applied Psychology*, 89, pp.483-496.
- Leary, M. R. 1986 Affective and behavioral components of shyness: Implications for theory, measurement, and research. In W. H. Jones, J. M. Cheek, & S. R. Briggs (Eds.), *Shyness: Perspectives on research and treatment*. New York: Plenum Press.
- 牧郁子・関口由香・山田幸恵・根建金男 2003 主観的随伴経験が中学生の無気力感に及ぼす影響, 教育心理学研究, 51, pp.298-307.
- 松岡英子・押澤由紀 2001 中学生の自尊感情を規定する要因—学校生活を中心に— 信州大学教育学部紀要, 104, pp.133-143.
- Mayer, J. D., & Salovey, P. 1997 What is emotional intelligence? In P. Salovey & D. Sluyter (Eds.), *Emotional development and emotional intelligence: Educational implications*, pp.3-34. New York: Basic Books
- Schutte, N. S., Malouff, J. M., Hall, L. E., Haggerty, D. J., Cooper, J. T., Golden, C. J., & Dornheim, L. 1998 Development and validation of a measure of emotional intelligence. *Personality and Individual Differences*, 25, pp.167-177.
- Salovey, P., & Mayer, J. D. 1990 Emotional intelligence. *Imagination, Cognition and Personality*, 9, pp.185-211.
- 瀧野揚三・斉藤誠一 1991 青少年のself-esteemの特質とその規定要因—学業成績との関連の検討— 大阪教育大学紀要第IV部門 第1号 pp.13-19.
- 豊田弘司 2006 大学生の自尊感情と自己効力感に及ぼす随伴・非随伴経験の効果 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 15, pp.7-10.
- 豊田弘司・森田泰介・金敷大介・清水益治 2005 日本版 ESCQ (Emotional Skills & Competence Questionnaire) の開発 奈良教育大学紀要, 54, pp.43-47.
- Wong, C. S., & Law, K. S. 2002 The effects of leader and follower emotional intelligence on performance and attitude: An exploratory study. *The leadership Quarterly*, 13, pp.243-274.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, pp.64-68.